

〈共同研究報告〉

日本型システムとその分析的視点

吉田和男

1 はじめに

今日、日本型システムに対する関心が世界的に強くなっている。これは日本経済の発展の驚異だけでなく、経済発展にともない、経済摩擦を引き起こすなど、世界での経済プレゼンスの大きさがそうさせている。いわゆる近代化に成功した日本は、世界を支配したヨーロッパに対して本格的に対抗した唯一の存在であった。その挑戦のピークとなった大東亜戦争に敗北すること、その矛先を経済面に集中することとなった。そこで、経済大国となった日本の経済的プレゼンスが再び世界からも注目を集めるこ

とになる。非ヨーロッパ人として唯一近代化に成功し、唯一経済大国になった日本の特殊な経済発展形態に対する関心が集まるのも自然である。そして、シンガポールのリー・クワンユー元首相の「ルック・イースト」のように、日本型システムの導入を図る国々が生まれ、それによって大きな経済的成果を上げたアジア諸国も出てくる。いまやアジアは世界の経済成長のセンターとなっているが、日本型システムが与えた影響は少なくない。

一方で、世界が経済的に一体化する中で、経済システムの違いが引き起こす問題が目される。その意味で、日米構造協議は画

期的な国際協議であり、日米間での経済システムの相違そのものが外交交渉の議題となった。このシステムの相違に対する関心は米国の貿易不均衡と相互主義の高まりによって大きくなっている。この米国における論争の中で、リビジヨニストとよばれるグループは日本が異質であることを主張する。そして、日本経済の閉鎖性に対して、報復をもって市場をこじ開けるべきという主張となる。そして、日本に対して、米同等の開放的なシステムに改革することを要求する。これまでの伝統的な欧米型のシステムだけで構成されていた世界経済へ侵入した異質なシステムと見られている。

しかしながら、閉鎖的な日本型経済システムがそもそも不正であるから、その是正が必要であるという主張は、まるで社会的に不適合な犯罪者を矯正すべきというような発想である。また、伝統的な経済学が持っている価値観を無意識の内に押し付けていることになる。元々、典型的な資本主義経済は多様な価値観を許容できる優れた性質を持っているが、これにも限界があることに留意する必要がある。

世界は様々な経済社会システムを持っている。例えば、中国、インド、アフリカ、アラブなどの経済を見ても欧米とは大きく異なっている。また、欧米各国の経済システムでも吉田（一九九三B）で示されるように、アメリカとヨーロッパの間、また、その差異は少ないもののヨーロッパ各国間でも経済システムの相違が存在する。また、吉田（一九九四A）にも示されるように、各国で価値体系に違いがあり、システムの作り方が異なるのは当然である。日本人にとって価値体系の著しく異なる欧米型シス

テムの理解が難しいのと同様、欧米人の目から日本型システムを理解するのが難しいのは自然なことである。日本は非常に長期に亘って独自の歴史を展開してきたが、欧米と異なったシステムを作ったとしても不思議はない。この日本型システムを欧米の伝統的な社会科学で分析しようとしても無理があるのはやむをえない。これを分析するためには独自の方法が必要になる。

2 日本型システムの特徴

日本に高度経済成長を達成させ、石油危機や円高を乗り越えてきた日本型経営システムはこれまで大きな賞賛を浴びてきた。一方では、貿易摩擦の原因となり、また、日本人にも会社人間を生むものとして批判の対象ともなっている。このシステムは欧米の経済システムと多くの異なった特徴的な側面を持っており、Abeglien (1958) や Drucker (1971) が優れたシステムとして終身雇用、年功序列、企業内組合という日本型経営システムを指摘する（筆者の

考えは、吉田（一九九三A）において整理されている）。

しかし、これらの「システム上の特殊性」は経済システムにのみ限るものではない。例えば、政治システムにおいても同様である。日本はイギリスやドイツと同じ議会制民主主義体制ではあるが、内容的には大きな差異がある。長い期間、自民党が政権をとり、社会党が野党として批判するという形を続けてきたことにもよる。連立政権の成立により様相は大きく変わったが、日本型政治システムの特異性は必ずしも変わっていない。政権政党であった自民党は派閥単位で行動し、ポストと利権の配分を行ってきた。そして、そこではポストが支配し、ポストの持ち回りで首相が選出された。ほとんどのポストは年功序列（当選回数）で決められる。選挙ではほとんど意味のない公約しか行わないために、実際の政策は官僚が決めることになる。法律案のほとんども官僚によって企画立案される。そして、国会ではそれがほとんど修正されないで成

立していた。

そして、長老支配、首相のリーダー・シ
ップの欠如が政治の基本であり、これは与
党内の全員一致の原則や採決について野党
の合意を必要とするという西洋民主主義で
は考えられない制度が存在していた。これ
は中選挙区制度という欧米に例のない選挙
制度をとったことによるのである。これも
逆に見れば、この選挙制度が選択されてき
たのは、日本人の争いを好まない性向によ
るのかも知れない。中選挙区制度はまさに
大正十四年に、当時の護憲三派内閣がそれ
ぞれの政党の候補者がまんべんなく当選す
ることを目的に作られた。

この結果、農業分野などに典型的に見ら
れるように少数者の利益を求め少数が支配
する政治となり、政治家の主たる仕事が地
元への過度の利益誘導や公共投資の政治的
配分となる。そして、巨額の選挙費用がか
かり、この巨額の資金を調達するために利
権配分を行うという矛盾を繰り返すことに
なる。

行政の実行者である官僚組織も特異な存
在である。政府による法案の起案、法的根
拠のない行政指導、稟議制度、各省庁の縄
張り争い、極端な残業、審議会制度等も独
特な制度・運営である。法律の運用におい
ても同様である。ダツカ事件の対応でみせ
た超法規的措置なども欧米人の理解を越え
るものである。民主主義や法治国家の原
則から見て不都合であっても、「皆が認め
れば」それでよいのである。

この背景には、日本の伝統的な政治形態
である天皇制度が存在する。何も決めない
最高権威者がおり、Wolfren (1989) もい
うように、あらゆる場合において、日本で
はいつたい誰が決めていくかがわからない。

ゲーデルの不完全性定理から、欧米のシ
ステムにはメタ・システムが存在し、階層
的構造になっている。そして、あらゆるシ
ステムの頂点には「神」の存在があり、こ
れは証明の必要のないものとなる。しかし、
日本型システムにはそのようなメタ・シス
テムが必ずしも存在しない。論理の構成に

おいて上下の序列が良くわからないものが
少なくない。従って、システムの論理は極
めて曖昧なものとなる。

このような構造は政治だけではなく、一
般の様々な組織にも共通するものである。
一見、不合理と判断されがちな現象も日本
型システムと深く係わっている。ここでも、
欧米のシステムとは大きな違いを見つける
ことができる。

日本型システムの特徴は、その他の社会
システムでも数多く見られる。「家」の重
視、芸道の家元制度、ヤクザの存在、大学
の応援団、学校におけるイジメも欧米の理
解を越えるものである。スポーツの世界
でも極めて日本的なものを見ることができ
る。異常なゴルフ熱、封建的な相撲界、精
神主義のアマチュア・スポーツ、特に、大
学の体育会系クラブのシゴキ、など西洋人
でなく、日本人でも理解に苦しむものが少
なくない。

日本の宗教観も独特のものである。神道
を宗教と呼ぶべきかどうか難しいが、ヨ一

ロツパの宗教観とは極めて異なつたものとなつてゐる。八百万の神々、教典・教義の不存在、人間的な人格神、神と人間の区別がほとんど分からない。また、逆に傑出した人物、英雄は神として祭られる。松陰神社、東郷神社などはその例である。葬式仏教、巨大な新興宗教団群、他の世界では圧倒的なキリスト教がふるわないことは日本人の特異な宗教観に大きく影響してゐよう。

さらに、正月は神道、葬式は仏教、クリスマスはキリスト教と自由自在な宗教活動(?)はヨーロッパの宗教観からみれば、理解が難しいところであろう。結婚式も和服を着なければ神式で、洋服を着なければキリスト教式といつて自由自在である。生活習慣でもお中元、お歳暮、近所付き合い、お土産、旅行の写真、見合い結婚など特異な社会関係はいくら上げてもし切れない。

さらにもうすでに現在には存在しないのであるが、切腹、特攻隊、敵討、人身売買的な売春、またそれを普通の社交場とする感

覚など今日の日本人でも理解に苦しむものが極めて多い。しかし、よく考えれば、程度の差こそあれ現代の日本人の行動に似たものがないわけではない。

外国人に、「なぜ日本はそうなのか」と問われても答えるのは非常に難しく、答えに窮することがしばしばである。それは説明すること自身が難しいのではなく、欧米の論理によつて説明することが難しいのである。すなわち、欧米の論理において重要な概念が日本型システムを支配しているためである。

ポール・ボネ氏の『不思議の国―日本』という表現は、東洋の異国の表現として正に当をえていよう。このシステムを分析するのに欧米の伝統の中で育まれてきた社会科学を適用することが不適當であるのは直観的にも理解されよう。独自の分析の手段を持たなければ、日本のシステムを理解し、これを改革して行くための科学的な分析は不可能となる。

3 欧米型システムの特徴

日本人は西洋社会から多くのものを学び、非ヨーロッパ人としては初めて近代社会を完成したと自負している。しかし、リビジヨニストでなくとも欧米人なら日本社会を近代社会と見る限り、奇異に思い不思議の国と見るであろう。これを単なるエスニシティや特殊性論としてとらえることとなれば、あまり意味のないことになる。この様な日本社会の特徴は日本型システムの作り方に依存しており、欧米とは別の合理性の枠組みの中にあることを考えなければならぬ。

そこでまず、比較の対象としてヨーロッパで発展してきたものの考え方についてみることにする。欧米各国は独自の文化を持ち、それぞれ特徴的な発展を遂げてきたことはいままでもない。しかし、種々の分野において多くの共通した特徴を見ることが出来る。ステレオタイプな議論であるが、これはギリシャ・ローマの伝統の中で、キリスト教という共通する宗教の下にあった

ことが大きな要素であることは間違いない。いわゆるヘブライズムとヘレニズムの二つはそれぞれの特徴を示しながらシステムを構成する大きな要素になっている。何にもまして、近代に生まれた個人主義が社会のシステムを形成している根源となる。そして、村上・公文・佐藤（一九七九）が示すように、「欧米的『人間性（ヒューマニズム）』が外的世界（とくに自然）に対する人間中心主義（アンソロポセントリズム）」を主張するものであった。これに対して、「日本的『人間性』ないし『人道』はむしろ、間柄やそのなかに含まれている人々への配慮を主張している」と欧米と日本の倫理観の違いを説明している。

そして、近代という概念が生まれたことよって社会システムは個人主義の論理として完成し、極めて高い効率を実現することとでヨーロッパは世界を支配することとなる。政治的には民主主義であり、経済的には資本主義という基本的な枠組みが形成された。この基礎には、「理性の原理」に基

づく個人主義のシステム論理が存在している。

ともかく、近代の方法は、科学を大きく発展させ、資本主義経済を発展させ、人類は過去とは比較にならない経済力を手に入れることとなった。さらに、政治的な民主主義の導入は個人の自由を確保して活動領域を拡大してきた。近代の成果の大きさはいまさら論ずるまでもない。日本も近代ヨーロッパの概念を積極的に取り入れてきた国の代表であり、今日の日本型システムの基本の多くも西洋の論理によつて設計・運用されている。

しかしながら、欧米の論理がオール・マイティーであるわけではない。世界史は西洋史だけでなく、中国、インドなど独自の歴史を辿つてきている。トインビーは五つの世界史が存在するというが、西洋史を世界史と考えるのがヨーロッパの伝統であった。この意味から西洋から輸入された学問は、この様な西洋近代の概念しか持っていない。すなわち、伝統的な科学の方法には

限界がある。

先に述べたように、欧米にはない要素を持つ日本型システムを欧米の人々に説明するのは容易ではない。伝統的な科学の方法による分析、すなわち、個人主義モデルを基礎とした欧米型のシステムを分析する方法では日本型のシステムを十分説明できない。

4 「伝統的科学的限界と「関係」の重視

近代科学はデカルト・ニュートンによつて確立された要素還元法と因果律を重視する方法をその基礎としている。すなわち、観察対象を要素に分解し、その要素についての知識を活用し、因果的な関連を探索することで全体構造の分析を行う。これによつて理解が進むことで、これを応用してさまざまな技術を生み出してきた。

実際、科学の先駆者である物理学の世界においては、ニュートンが保存則や要素還元主義の立場をとることで大きく発展した。ここでは、要素間の相互関係がないことを

仮定して理論を構築することにより、問題は非常に簡単になる。これが科学を大きく発展させた。今日までの科学の恩恵の多くは、この仮定に基づいている。

欧米で発達した社会科学は、経済学に典型的にみられるように、この科学の立場に立ちながら個人主義モデルを基本としてきた。消費を行って利益を得るのは個人であり、個人が働くのは個人が消費を行うために賃金を必要とするからである。企業は集団であるが、それを管理するのは経営者という個人であり、経営者は株主から指名される。経営者は自分を選んだ株主の利益を最大にするように期待されているのであり、株主という個人の利益を高めるように行動することになる。企業のヒエラルキー・システムを考えれば、企業内での労働者と経営者の取引の問題に還元させることができる。

このように、伝統的な理論は、個人は他の個人とは独立した存在であり、彼の選択する全ての組み合わせに対して最適な判断

を選ぶことが可能であるという仮定に基づいた個人主義のモデルなのである。例えば、消費者の選択は、ある代表的消費者が予算と価格ベクトルが与えられたとき、彼の効用関数を最大にすることである。最適化の必要条件を求め、それをアグリゲイトしたものが需要関数となる。効用関数が同じ性質を持つのであれば、ミクロレベルでの行動と全体として観察されるマクロレベルでの現象には矛盾が生じない。したがって、市場価格を見て経済行動を決めている消費者の効用関数が同様の性質を持つのであれば、ある価格の変化に対して同一方向に反応するものとして扱うことが可能になる。となれば、以上の議論が棄却されないことは需要の価格弾力性がゼロでないことをデータを使って検証することができる。

このような方法が社会科学を科学たらしめ、経済社会システムの解明や改革の提案を行ってきたのである。すなわち、伝統的な社会科学が依存してきた方法論は、近代の方法論的基礎であるデカルト以来の要

素還元主義の伝統に基づいてきた。社会を構成する要素である個人を分析の基礎におくことは、まさに近代の方法であった。これはまた、A・スミスの指摘する資本主義経済の倫理と表裏をなすものであり、個人が自らの能力を最大限生かし、個々の利益の追求と社会全体の利益とが調和することが市場に期待されていた。そして、Friedman (1962) や Hayek (1944) の指摘するように、資本主義経済は個人に自由を与えるものとして、伝統的なヨーロッパの倫理と整合的な唯一の制度として理解されることとなる。

特に、「自由、平等」といった理念によって建国されたアメリカの場合、価値観の異なる人々が個人の能力を最大限生かせる社会を作ることが追求されてきた。ここでは、市場が有効な役割を果たし、人々は市場原理に従って行動することを前提とする社会になった。伝統的な経済理論はより純粹な形で発展せられ、高い有効性を示すことになった。まさに、吉田(一九九三B)

(一九九四A) が示すように、多様な価値観を許容する市場メカニズムはアメリカの倫理と合致するものであった。自由競争はフェアの原理と一致する。

このように、伝統的な理論は、全体は部分(個人)で構成されるので、代表的個人を分析して、これをアグリゲイトすれば全体が分かるという仮定の下での分析であった。また、この伝統的な経済学は、Becker (1975) & McKenzie = Tullock (1975) 等に見られるような結婚、犯罪などの非経済行動の分析にまで拡張される。

このような欧米で発達した伝統的な社会科学で日本経済社会の様々な現象を分析しようとする試みは今日数多くなされている。しかしながら、このような試みは現実には難しく、かなりこじつけにならざるをえない(伝統的経済学による日本型経営システムの分析については吉田(一九九四C)を参照)。例えば、日本型システムは長期的利益の追求であるという。長期取引を行うのは、短期的には利益が小さくとも長期的に利益が

あるためとする。しかし、特に日本人が視野が長くて長期的利益を重視しているともいいがたい。特にバブル期の企業行動が長期的な視野を持っていたとは思えない。これは結果を言い換えているにすぎない。

また、日本の労働者がよく働くことはだれしも認めるところであるが、平等主義的な日本企業の賃金構造で何故働くかは十分に説明されていない。伝統的な理論によれば、賃金は労働のインセンティブであるので、よく働けば所得が増えるようになっておればよく働くはずである。しかしながら、日本の賃金格差は小さく、勤労に対して大きなインセンティブになっていないことはだれしも認めるところである。こうなれば、伝統的な理論に拘泥する限り、日本人の勤勉性について理解することもできなくなる。

5 日本人的特殊性論での扱い

一方、このような状況に対して、伝統的な経済学では全く理解不可能であるとして特殊性をそのまま議論として持ち出す立場が

ある。先に述べた、Wolfren (1989) などのいわゆるリビジョニストと呼ばれる人たちは、このような日本異質論を展開する。彼は日本の政治決定や経済操作のシステムは、欧米のものとは大きく異なり、各権力グループの力の均衡の上であり、誰も究極的な責任を負わない構造となっていることを指摘する。一見すると権力を握っているかのように見える政治家や官僚も全てを支配してはいない。それ故、日本型システムはそのサークルの外側にいるものからは分かりにくく、通常の交渉では役に立たないもので、圧力をかけることが有効的な目的達成の手段となるとする。この議論は日本型システムの一面を適確に示しているものの、そのメカニズムについて説明を行っているわけではない。

一方、日本の研究者にも日本型システムは日本文化であるとする、特殊性理論として議論することが有力である。日本がヨーロッパから「文明」を導入したところから、日本分析も欧米文明との緊張関係が基本に

あるのは当然であろう。そこで、彼らの多くは日本型システムは、日本文化に基礎を置くものであり、外国人には理解不可能なものとする。すなわち、すでに欧米でも確立されている文化相対主義の枠組みの中で正当化しようとする。ここで、一般的に行われる議論としては、文化の影響を強調するものとなる。

日本人は農耕民族であるので、よく働き、よく貯蓄をするという。確かに狩猟民族との性格の差異はあるが、ではヨーロッパ人は働かないのか、アジアの農耕民族が総て経済成長したのかといえば、そうではないであろう。文化論はそれなりに説得力があり、わかったような気にさせるのが恐ろしいところである。しかしながら、異なるから異なるという開き直りで議論することとなつては、システムを改善して行く方法を科学的に見いだしえない。

また、日本人は儒教文化経済なので成長したという議論も良くみられる。例えば、森嶋（一九八四）は、欧米人のホモ・エコ

ノミカのイデオロギー的バックボーンがキリスト教、特に、プロテスタントイイズムにあるのに対して、日本人のそれは儒教であるとする。確かに、日本経済のパフォーマンスは優れ、現実の資本主義が Weber (1904) の指摘するようなプロテスタントの影響の強い西欧的気質だけではなく、儒教の影響を強く受けた日本人の気質とも適合している。しかし、儒教国家の中国、韓国、ベトナムなどが総て経済成長を行ったのかといえば、必ずしもそうでない。日本人の勤勉の精神は儒教ではなく、むしろ儒教を一部とする石門心学などを軸に理解するほうが優れている。文化的な背景は重要ではあるものの、それだけをもって議論することが過ちであることは明白である。

また、吉田（一九九四D）が指摘するように、日本型経営システムの形成にも日本の歴史的な変遷は重要であるものの、それによって理解されるものは限界がある。近年、戦時体制が日本型システムの源流であるという一九四〇年体制論が流行である。

しかし、当時、日本と同様に統制経済を行つた国は少なくないが、戦後の日本と同様の経路をたどつたわけではない。これも一つの要因にすぎなく、システムを解明していることにはならない。この様に文化特殊性議論として持ち出す立場は「異なるから異なる」というトートロジーに陥り易い。文化が異なるから経済システムも異なるというだけの議論に陥れば、何も分析したことになる。

さらに、この様な態度は劣等感の裏返しとしての優越感に移り、イデオロギイ的文化的価値を求めることになる。山崎（一九九〇）も文化論に走る傾向に対して「自分達の文化にある固定観念の枠をはめて、それを変えたいとするかたくなな態度が芽生えている」と警告する。この様な文化特殊性理論で論争する限り、日本型システムを改革するための分析も出てこないし、また、国家間でお互いに異なったシステムを理解することにもならない。より普遍的な理論で日本型システムが分析される必要が

ある。

6 個人主義と集団主義

社会学的な立場から先に述べたような日本型システムの特徴を見て行くとともに、分析の視点は「集団主義」である。現実の日本の社会の特徴を欧米の視点でみれば集団主義という見方をとることは極めて自然である。そこで、日本の経済社会の特徴として、集団主義的行動が指摘され、欧米の個人主義的システムとの対比が行われる。人々は個人的なインセンティブがないのに組織が必要とする方向に一丸となって努力する。確かに、同質的な意見を持ち、個人の利益でなく集団の利益のために働く日本人の行動は集団主義とみられる。

しかし、集団主義と言っても、社会学で伝統的に議論されてきた集団に関する理論とは大きな違いがあることに気が付く。欧米にも家族、国家、軍隊、教会、企業、結社などの多くの集団があり、それらは集団主義の立場から議論することができる。す

なわち、伝統的な集団主義に関する議論には、なんらかの原理が重要な役割を果たしている。

しかし、濱口・公文（一九八二）はいわゆる集団主義として日本社会を理解することの危険性を指摘している。「つきあいのための賛成」「日本人の集団同調性は……豊かに備わったシステムの自律性の表出にほかならない」と集団主義でないことを強調する。また、間（一九七二）も個人と集団との関係は対立・協調ではなく融合・一体化にあることを主張する。木村（一九九三）はキルケゴールにおける「個人は人間キリストとの出合を通じて、神と内面的な関係を持つ」という関係の対比として神道における「自然¹¹おのずから」を最高の理念として「自己¹²みずから」をもそれに従属させる¹³考えを示す。ここに「関係としての自己」が成立するとする。

すなわち、日本型システムを集団主義として理解することは「日本の集団主義」を理解することにならない。濱口・公文（一

九八二）は「日本的集団主義」であって、社会学で使われる個人主義の対立語として使われる集団主義ではないことを主張する。すなわち、日本的集団主義は原理、イデオロギー、典型的な教義などを持った集団主義ではない。日本社会の集団の論理を見つけ出し、社会を維持しているメカニズムを分析することが重要になる。

そこで、後で述べる「イエ」や「ムラ」を基盤にした集団主義を共同体論理から導こうとする議論も非常に有力である。集団主義と言っても欧米の集団理論の類型から日本の集団主義的行動を分析することには限界がある。日本人の自らの行動の説明原理は「みんながしているから」というものである。

一方、日本人の集団主義に関する議論において日本人の個人主義の側面が軽視されていると、山崎（一九八四）は批判する。彼は「ここで見失われていたのは、まさに『個人の生涯』という時間であり、人間をこの世に位置づけるいわば生活の縦軸存在

だったといえる……宗教的な永遠の時間さえあるはずだが、近代の日本人はそれを忘れて、もっぱら自己と集団をつなぐ生活の横軸の上に生きてきたのである」と指摘する。

また、山崎は社交を重視し、「日本には……さまざまな社交が人間を小集団に組織する伝統があつて、そのなかで広く大衆に自己表現を許し、生きがいと規律を同時に教える機構が多数あつた」、「複数の集団への帰属は、人間を評価するメリットクラシ―をも多元化することになり、個人としては、一方の満足されえなかつた誇りを別の集団のなかで補うことができる」と日本の個人主義の将来のあり方を示す。「日本人が忠実なのは集団一般ではなく、自分の置かれた比較的小さな部署に対してであつて、いいかえれば、隣の顔も見え、自己の『分』も目に見えるように作られた集団に對してである」という。

特に、山崎（一九八七）は没個人主義的性格の土地への帰属心をもつムラ型日本人

は日本人の半分であり、公家商人型日本人は「柔らかな個人主義」であり、「日本の近代化はむしろこの系譜の精神によってこそ開拓された」とする。「集団の対外的な優越感が個人の誇りを支え、その誇りが個人を厳しい自己規律に耐えさせた」とし、さらに、山崎（一九九〇）は日本社会を農耕的、家族主義的文化としてみようとするが、これらは時代の反映にすぎないとする。

文化論の陥りやすい危険として、「それぞれの時代の現状を動かしたいものとして、その説明を過去の伝統に探ろうとする」とあり、「協調主義は俗論のいう集団主義ではなく、没個性的な全体主義とは無縁である」とする。また、「個人主義とイエソ社会の間人主義が何ごとかの程度の違いではなく、実存する深みまで根ざした、原理の違いに支えられていることを明らかにする」と、原理的な問題を明らかにして「イエソ社会の構造が日本文化の真に中心的な特性だ、という事実を証明」すべきと、村上・公文・佐藤（一九七九）を批判する。

「日本文化を集団主義の文化と呼ぶ人たちは、多くの場合、暗黙のうちにこの大国主義的な文化観に毒され」、「個人は存在するのではなく、自己を主張し、表現することによって個人になる」のであり、「個体の個性もあいまいだが、同時に、集団の力もまだ激しい一定の方向をとっていない」という見解は極めて説得力がある。いずれにしても、欧米の個人主義や集団理論の類型から日本人の行動を分析すること自身限界があるのもいうまでもない。

7 日本の集団主義

このように、仮に集団主義という概念で把握するとしても、伝統的に議論されてきた集団に関する理論とは大きな違いがある。日本の集団主義には、集団主義で重要な役割を果たす何らかの原理が欠如していることが少なくない。

先に述べたように、濱口・公文（一九八二）の示すのは「日本的集団主義」であつて、「日本人の集団主義は、成員の組織へ

の全面的な帰服を指しているのではなく、他の成員との協調や、集団への自発的なかわり合い」が重要になる。同様に、村上・公文・佐藤（二九七九）の日本の集団主義に関する指摘は「イエ」であり、「人為的集団において、存立根拠の具体的内容は、前節に述べた『集合目標』についての合意にほかならない」と融通のある共同体論理から導こうとする。すなわち、彼らは「歴史的発生をたどれば、『集団』という概念は、実は『個人』という概念からの派生物であり、このような間柄の対象化の方向は、全体論的社会観、またはいわゆる集団主義とか集団という言葉が個人主義の文脈で生まれた概念であることからすればむしろ間柄主義（ないし惣体主義）、と呼ばれるものの出発点である」とする。

また、日本社会の特徴としての「集団主義的行動」は状態の表現であつても何等の分析を行っているものではない。なぜ集団主義的行動を行うかのミクロレベルでの説明にはなっていない。集団主義的な行動も

個人の行動原理から説明されなければならない。日本人の集団におけるミクロレベルの行動と集団行動というマクロレベルでの日本の集団主義の関係を明確にすることで日本社会のメカニズムが明らかにになる。この様な視点からも日本社会の分析についても新しいパラダイムが求められる所以である。

すなわち、Popper (1950) に代表される方法論的個人主義、すなわち、「全ての社会現象、そして特に全ての社会諸制度の機能は、常に、諸個人の決定、行為、態度などから理解されるべきであつて、いわゆる『集団』の観点からの説明に満足してはならない」とする要請に応えなければならぬ。これは集団主義として見られる現象を集団主義と説明したとしてもトートロジーにすぎない。なぜ、個人は集団主義的行動をとるかを答えねばならない。

しかし、ここで要素間関係があると議論は極めて複雑になる。ミクロとマクロの関係は両者の相互依存の関係のなかで示され

なければならない。この様な構造を説明することこそがポパーの主張するところである。

8 日本型システムの分析的視点

現実の日本の組織の観察からはさまざまな特異な現象が確認される。集団的な意思決定まで非常に時間がかかるが、決まれば一団となつて実行に移す。意思決定のプロセスが明確でなく、雰囲気によってなんとなく決つてしまう。環境の変化に対しても遅く反応するが、一旦、動き出すと反応するときには急速に変わる。同じ集団が突然全く異なった方向に動くこともある。このようなヒステリシスやカタストロフィーといった非線形体系に特有の現象を示すことがよくある。集団主義としても、日本の集団の行動は非常に不可思議な要素を含む。もし、人々がそれぞれ効用関数を持ち、自らの利益を追求しているとすれば、環境の変化に対しても連続的に変化させ、インセンティブのあるところに行動は偏つて行

くはずである。また、集団主義的に理解するのであれば集団の原理に沿った意思決定が行われるはずであるが、突然、異なった方向に動くことも少なくない。伝統的な理論ではヒステリシスやカタストロフィーなどの現象を説明することは不可能である。

さらに、日本人の働き蜂ぶりを企業への「忠誠」によつて説明しようとするが、日本の労働者の全てが働き蜂ではない。非効率な集団も少なくない。農業、教育、企画部門以外の公務、旧国鉄なども、同じ日本の労働者でありながらいわゆる日本的と指摘されるような性質は見られない。日本社会に関する理論はこれらの例外も同時に説明できるような理論でなければならない。

先にも述べたように、経済学に典型的にみられるような個人主義を基本とする伝統的な社会科学では日本社会の様々な現象を説明することが難しく、かなりこじつけにならざるをえない。伝統的な経済学も個人主義のモデルを考えることにより、社会は非常に単純な形で理解される。これらの議

論の根本は、伝統的な方法が個人主義の社会の観察から独立した個人の嗜好を基礎にして、個人間の相互依存作用を軽視してきたことによる。すなわち、近代ヨーロッパにおける個人主義概念による社会科学の確立は、時間的に「近代」空間的に「ヨーロッパ」という特殊性の中にあつたと理解すべきである。

これに対して、先に述べた濱口（一九七七）（二九八二）の間人主義概念は新しい社会構成の基本概念として有用な議論となる。濱口（一九九三）は、さらに拡張し個体概念と関係体概念を示し、システムの「何が集まっているかでなく、いかに集まっているかを見る、すなわち実態概念ではなく、関係概念による集団認識の仕方」と規定する。この関係体のモデルとしてホロン、ネットワークキングといった概念を日本型システム分析方法として活用することを評価する。

この要素関係を重視することは、社会科学の世界観を一変させてしまう。例えば、

先に述べたように、経済学では人々は価格を所与として予算制約の範囲内で効用を最大にさせるような組み合わせを決めることになる。しかしながら、現実の経済はそれようにはならない。なぜなら、消費者相互間でお互いに影響しあつて経済行動を決めているからである。ある消費者の消費が他の消費者に羨ましいと思われ、その消費を促進させたとする先の議論とは全く異なってくる。

要素間の相互依存関係が強い場合の行動を考える場合には、価格などの所与のパラメータに従う消費行動のモデルでは不十分になる。伝統的な理論では、ミニスカートが流行したり、突然新製品が売れ出したりすることを説明できない。消費の問題などは比較的、相互依存関係が小さく問題は少ないであろうが、企業内の生産システムなどを考える場合は労働者は直接情報交換を行っているわけであり、要素間の相互依存関係の効果を無視することは適当でなくなる。

日本において理論と現実の間にギャップが生まれるのは、伝統的な経済学の方法が個人主義社会の観察から生まれていることによる。独立した個人の嗜好を基礎にして、個人間の相互依存作用を軽視してきたことによる。すなわち、伝統的な社会科学では、個人は確固とした効用関数ないし原理原則を持ち、その目的に合理的な行動を決定するという「仮定」に基づいている。しかしながら、このような仮定をおくこと自身、多くの観察に反する。人々は周りの人間に大きく影響されるのが普通である。

日本型システムを理解し、科学的に分析するためには、欧米で発展してきた社会科学の分析方法を拡張することが必要となる。先にも述べたように、欧米論理対日本論理という二分法では結局、日本型システムを理解したことにはならない。

科学の立場をとる限り、日本型システムの特殊性を分析するにしても特殊性を前提とする論理から出発することはできない。伝統的な理論は人々の行動原理を、人間の

持っている属性を出発点とする。すなわち、人間行動の公理系から理論を導き出す。このような立場をとる人々でも、アメリカ人の多くがどこまでも自分を主張し、自分の正しさと優秀性を論証しようとする姿勢に接すれば日本人とは違うなという感じを持たざるを得ないであろう。できる限り議論を回避し人との摩擦を生じないように努力しながら、それでいて、裏で結構ブツブツ文句を言う日本人と欧米人との間にコミュニケーション・ギャップを作っても不思議はない。

また、データとの検証において理論の適否を議論することが科学の一般的な方法である。しかし、Popper (1959) などによって確立された科学的方法も、日本型システムの分析への完全な適用は難しい。これは吉田(一九九〇)の示すように、ポパー的反証主義は非線形体系においては限界がある。仮説の中の基本原理が直ちに反証されるようでは有効なものとはならないといった程度のことしかいえない。とはいえ、

現実を観察されることで反証されうる形式になっており、また、直ちに反証されないことは科学としては必要である。いずれにしても、日本社会を分析するためには「本音と建前」「利益と人間関係」などの間で葛藤を基本的な行動原理としなければ説得的ではない。そこで、科学的な手順を維持しながらも、欧米から直輸入の理論に対抗する代替的なパラダイムを導入することが日本型システムを分析するためにぜひとも必要なこととなる。

9 変化する科学

これまで述べたように、伝統的な科学の立場である要素還元主義によって分析を行う際に際しての重要な仮定は、要素間の相互依存関係が小さいことである。要素間関係が強い場合には、ある要素を取り出すと、それが持つ単独での性質と全体の中で機能しているときの性質は全く異なる。すなわち、このような場合には、全体を要素に分解、その性質を調べ、それを全体として組

み立てるといふ方法をとると、そうすること
とで、分析すべき対象と異なったものを調
べたことになってしまふ。

このような現象は、プランク、ボーア、
ハイゼンベルグ等によって発展させられた
量子力学という一つの革命を行った。ここ
では要素間の関係が重要な役割を果たすこ
とが明らかにされた。さらに、量子力学に
加えて、熱力学の発展も古典物理学に大き
な変革を引き起こし、さまざまな分野でデ
カルト＝ニュートンの科学からの脱皮が
行われた。

熱力学の世界では、我々が容易に観察で
きるマクロ現象としての熱やエントロピー
は、単に代表的な分子の運動を記述するだ
けでは不十分であることが明らかとなる。
分子間のお互いに与える影響が重要となる。
ここからそのミクロ的な相互依存関係の記
述が本質的に重要であることが示された。
ここでは「関係」が重要な役割を果たすこ
とが明らかにされた。ここから Haken
(1978) (1983) のシナジェティクスや

Nicolis = Prigogine (1977) の散逸構造
論など新しい科学を生むことになった。こ
れは Nicolis = Prigogine (1989) の複雑
系の議論となり、カオス理論などともに
非線形数学の発展とあいまって新しい分野
を生みつつある。ここにおいては要素間の
関係が重要視され、ミクロ的な要素関係が
作り出すマクロ的な状態についての解明が
行われている。

例えば、Haken (1978) (1983) は、要
素の状態分布の動きをフォッカー＝プラン
ク方式として表現し、要素間関係が強い場
合には、個々の要素が独自の動きを行うも
の、それが作り出す「場」が逆に要素を
支配するモデルを示す。ハーケンは、これ
を「隷従原理」と表現しているが妙を得た
表現である。このことはネットワーク型の
システムも「場」を司令者とするヒエラル
キー・システムとして理解されることが示
される。Weidlich = Haag (1983) はこ
の考えを社会科学にも応用している。
これは山崎 (一九八四) の指摘する個人

と顔の見える小集団との関係であり、また、
個々人は個人の独自の意思として動いても
集団主義型の現象として目に見える濱口・
公文 (一九八二) の日本型集団主義が現れ
ることになる。これは吉田 (一九九三C)
の示すように、個人が他人との協調を図る
ことで全体が組織化され、要素間関係の強
さの程度によって、個人主義的社会と日本
型集団主義的社会的差異が生まれる。山本
(一九七七) の「空気」もまさにこのよう
な原理である。

個人の近傍に関係する他の個人と意見が
異なること自体、人間関係に緊張を生じる
ことになる。もし、この緊張を最小化させ
ようと動くとすれば、個人は自らの見解に
逆らっても近傍の状況に対して適応するこ
とになる。すなわち、個人が独立した効用
関数を持ち、社会的に所与のパラメータに
対応してそれを最適化させ、それによって
全体の均衡が導かれるというモデルとは異
なったものとなる。個人は他の個人とお互
いに影響を与えあう「要素間関係の仮定」

を導入する必要が生じる。要素間関係を導入することによって、伝統的なモデルから導かれる帰結とは全く異なったものになる。

また、これは日本の特殊性の議論ではなく、要素間関係の議論であるので、同時に欧米の経済社会を分析する新しい展望を開くものになる可能性もある。どの様な特殊性のある社会の分析においても、一般的な科学というルールを適用することで普遍性の論理として発展が可能になる。

この意味で、ある議論が特殊な問題を解くためであっても、その方法が普遍的であれば、それは普遍的な理論として発展していくことになる。例えば、カントの哲学はドイツ精神とも言うべき特殊性から生まれたものであるがその発展は全学問体系に及んだ。あらゆる論理は特殊性の中からしか生まれてこない。

10 ム 日本型システム分析の新しいパラダイム

日本型システムの分析には、要素間の関

係を基本にしたニュー・パラダイムの導入が必要となる。この新しい試みは成功するかどうかは不確実であるが、これによって欧米社会の分析にも重要な意味を持つことになる。ここで、筆者の議論とかかわるパラダイムのいくつかを示しておく。

第一に、近代の論理が個人主義に依拠してきたことは異存のないところであろう。そして、西洋社会が考えられるような個人主義でないとしても、個人主義モデルを導入することによって社会科学を科学たらしめ、問題を簡単にすることによって極めて有効な分析を可能にした。これを濱口（一九七七）（一九八二）の提唱する「間人主義」を導入することで、社会の作り方の可能性を拡張する。間人主義の要素の大きな社会である日本社会においては、個人は確固とした効用関数や行動原理を持つというより、相互に強い関係があり他人との人間関係の中で行動を決めて行くことを想定する。彼は西欧社会の個人主義の特徴として①自己中心主義②自己依拠主義③対人関係

の手段視を挙げ、一方、日本社会の間人主義の特徴として①相互依存主義②相互信頼主義③対人関係の本質視を挙げている。このことは間人主義社会は要素間の関係は極めて重要であることを前提としている。

人々にとつて、近傍の人々との関係を強化し、対人関係を良好化させることが行動の基本となる。これをゲーム的に解釈した吉田（一九八三）の指摘するように、これは安定的な協調関係を維持するために極めて重要な役割を果たすことになる。ここでは、人間関係をどの程度、重要視するかで全く異なった行動をとることになる。

この様な、強固な人間関係を前提とする、社会を構成する要素は強い相互依存関係の状態となる。相互依存関係が重要であることを前提としたモデルの帰結は、それを無視したモデルの帰結と大きな差が生まれて来る。吉田（一九九三C）は、要素間の相互依存性を重視する必要がある物理現象の分析モデルである Ising (1927) のモデル（磁性体が磁力を持つためには要素間

関係が重要な役割をはたしているという議論、詳しくは Ellis (1985) や深尾毅 (一九八七) を参照) によって日本型システムを表現し、その特徴を明らかにしている。

ここでは個人が他人との相克を避けるという協調行動をとることで自ら組織が形成されていくことになる。インセンティブが小さくとも要素間の関係が強ければ、一定の方向に集団が形成される。

第二に、日本社会は平等主義であることが指摘され、独特の分配のシステムが存在する。欧米の個人主義の側面である自己責任の原則とは異なり、日本のシステムは組織でその成果をプールし、一定のルールで分配することになる。自己責任原則社会では同時にシステムへの寄与のインセンティブにもなり、競争による分配をフェアとするのに対して、日本型システムではグループでその成果をプールし、非常に曖昧に分配する。日本の伝統的経済・社会システムはある目的を達成するために存在すると同時に相互扶助組織として機能しているの

が特徴である。これは桜井 (一九六二)、吉田 (一九九四 B) (一九九五 A)、金児 (一九九四) などの指摘する「講」が日本型システムを理解するには極めて重要である。

「講」は目的があるようでない、Tonies (1987) のゲマインシャフトでもなくゲゼルシャフトでもない。すなわち、「講」は特定の目的を実現するために協力する組織であるが、同時に共通した楽しみなどを実行する「仲間」である。「講」はヒエラルキー・システムではなく、共同体的組織となる。構成員は基本的に平等であって、世話はもちまわりとなる。人々は講のために尽力するが、同時に個人は共同的行動をとることで、個人的目的を達成する。

行為は自発的であり、自らそのときに応じて分業を形成する。「講」はそれ自身の相似形である「個」の關係の集合体として機能する。「講」は部分となってより大きな「講」を形成する。そして、外部からの情報や内部の矛盾によって発展、崩壊を繰り返す。

「講」という形の組織は日本型システムの分配的側面を意味している。これは一種の保険・年金機構として機能し、平等な分配を行うと共に、一定の条件を持つときに、吉田 (一九八六) (一九九五 A) の示すように、「制度の利益」を発生させる。これは特定の集団を作ること自身が直接的に利益になることを意味しており、欧米型システムと異なった合理性を意味している。

第三に、情報構造の違いが指摘される。欧米では分業による利益を重視し、これをシステム化し統合的に運用することによって、効率を上げようとする。個人の能力を最大限に生かすためには相対的に優れた分野に特化することが求められる。アダム・スミス以来、経済学は分業と統合の問題であった。ここでは基本的に市場の機能に依存する。価格の持つ情報機能がフィード・バックとなって経済全体にホメオスタシスを作り出す。現実の経済は、組織体が市場における主体となり、ここではより直接的な情報組織を持つ。業務を分業化し、これ

を統合化する情報機構を持つことは要素還元主義という近代の論理にも一致することになる。

ところが、日本型システムでは分業は曖昧で、建前は分業でも実際は分業になっていないというのは全く普通のことである。

分業は適宜、作業の必要に応じて変更される。このために、吉田（一九九三A）（一九九五B）の指摘するように、企業などの組織の構成員は情報を共有し、これによって自発的な組織化と自発的な寄与を引き出す。これは Wilber (1982) が主張するホログラム・パラダイムを現実のものとして実現することになる。赤提灯というインフォーマル情報伝達が日本型システムでは重要な役割を持つのはこのためである。欧米のヒエラルキー・システム、すなわち、組織の管理者は情報を集め、意思決定し、下部機関に指令するというものではなく、下部機関の内部の相克を調整し、情報の流通を高めることが主な役割となる。

全体は、Koestler (1978) のいうホロン

で構成されるホロンのシステムを意味している。また、清水（一九七八）の主張するパイオ・ホロンの形を考えると、より動的なネットワーク型システムの挙動として理解することが可能になる。

第四に、ウォルフレンや河合氏の指摘するように、意思決定の主体がどこにあるか明確でなく、意思決定の原則が明確でない。決定するのは情報の集中による上部機関からの指令ではなく、組織の要素間の協調行動によって引き起こされる自己組織化運動の結果生じる「ゆらぎ」、すなわち、偶然が決めて行くことになる。このような「ゆらぎ」に関する Prigogine (1980), Nicolis = Prigogine (1977), Prigogine = Stengers (1984) などを議論のアナロジーと考えれば、システムの制御者は存在しないのに組織は自己組織化され、「ゆらぎ」によって決められて行くことになる。従って、日本型システムは、その原則が分からず、意思決定自身が分かりにくいことから、外部からは極めて不可解な存在と見られる。

実は、その組織に属している者、そのリーダーたるべき地位にある者ですらそれを理解しているわけではないのが普通である。

第五に、今井（一九八三）（一九八四）、今井・金子（一九八八）、公文（一九七八）（一九八八）の指摘するネットワーク性がある。欧米において、市場を中心とする社会が個人主義の論理と整合的であることは先に述べた。市場の基本は個人の自由な選択と競争が基本にある。これはお互いに顔を見ない、また、見る必要のない取引である。この取引が市場において「均衡」という概念を成立させる。これは人々が価格の情報によって社会の複雑性を回避することになる。しかし、現実には、顔の見える取引を行っており、より複雑な通信を行うネットワークを基本とするシステムとなっている。これは当然のことながら複雑な動きを行うことになる。

公文（一九九三）（一九九四）は日本社会のモデルとしてネットワークを考える。日本人の行動を「ネットワークの中の自分

の立場をよくしよう（あるいは維持している）とする傾向があつて、これが全体的な秩序の形成と維持を容易にしている」と分析している。

さらに、ネットワークとしての社会は公文（一九九四）によって総合的に整理されている。「家計やコミュニティに見られるような濃密な人間関係、あるいはワルラス流の経済理論におけるすべてがすべてに関連しているような結びつきをその典型とする一般均衡方程式体系とは異なる、新しいアプローチ」であるとし、脅迫・強制によるもの、取引・搾取によるものに対して、「説得・誘導型の行為がその中で支配的な相互制御行為となつている社会システムの総称」「通有・互酬型の行為がその中で支配的な相互制御行為になつている社会システムの総称」であり、また、金子（一九八六）が言うように、ネットワークとして理解するとき「固有の意思と主体性のあるユニットがそれぞれの自由意思で参加したままとまり」でしかないことに留意しなければ

ならない。これは先に述べたホロン・システムの性質である。

人々が個人の行動として、先に述べた山崎（一九八七）の定義する個人が主張し、表現するという個人主義であつてもネットワーク社会では、Haken (1978) のいう「隷属原理」によって集団主義的行動に導かれることになる。日本経済は市場経済というよりネットワーク社会であり、これが解明されなければ何もわからない。

11 結論

結局、日本型システムを解明するために、導入されるべき新しいパラダイムの議論の中心点は要素間の相互依存関係が強い複雑なシステムの解明である。経済学を含めて伝統的な科学はデカルト以来の要素還元主義を基礎とする方法に依存してきた。ここでは、複雑な現象を引き起こす要素間の相互依存関係は無視されてきた。これまでは、これを無視することで問題を非常に簡単なモデルで表現してきた。すなわち、複雑な

ものを簡単なものとして表現してきた。これによって複雑な社会を解析し、政策提言を可能にした。しかしながら、その限界は明らかである。

自然科学の多くの分野では、既にそのトランプから脱却し、多くの研究が行われている。しかし、自然科学よりもさらに複雑で相互依存関係が重要な社会システムを対象とする社会科学がそのトランプから抜け出せないでいる。日本型システムを分析するには特に、この相互依存性、複雑性に対する考察が不可欠なのである。

しかしながら、これは必ずしも日本独特の現象の研究ではなく相互依存性や複雑性についての普遍的現象の研究なのである。ただ、これらの視点は今までは単に無視されてきたに過ぎない。欧米での経済学がそれを無視してもなお大きな成果を上げることができたが、日本経済を分析するときにはそれを無視することがフェイタルな問題となる。

さらに、ヨーロッパにおいても同じ個人

主義でも各国によって内容は異なる。特に、ヨーロッパの小国はむしろ日本人社会に近い印象を強く受ける（この点については吉田へ一九九四△参照）。比較システム論とともにその根源となる複雑システムの研究が行われることはヨーロッパ社会と日本社会を対立として理解するのではなく、異なった文明間のシステムを連続的なものとして理解することを可能にする。すなわち、ヨーロッパにも日本社会の特質とみられる現象が存在しても不思議でない。日本型システムの解明を行うことは伝統的な理論によって切り捨てられてきた欧米システムの問題をもう一度振り返ることになる。

このことにより、欧米社会にも共通する普遍的な新しい視野を開くことが可能になる。科学の先駆者である物理学の世界では、二十世紀に入り新たな大展開が行われたが、それは古典物理学において注目されなかつた観測の相対性、非連続性、要素間の相互依存などが認識されたから生まれたのである。このことは、日本型システムの分析と

いう特殊性論の研究が新しい普遍的理論へ発展していく可能性を示唆するものと考えらる。

注

本稿は国際日本文化研究センターで開催された「日本研究・京都會議」セッションE 5「日本は本当に異質・特殊か？—日本研究パラダイムの再検討」に提出した論文を修正したものである。コメントを戴いた諸氏に感謝申し上げる。

参考文献

- Abeglien, J.C. (1958), *The Japanese Factory: Aspects of Social Organization*, Free Press
- 間宏『日本の経営—集団主義の功罪』日本経済新聞社 一九七一年
- Becker, G.S. (1975), *Human Capital*, Columbia University Press, New York
- (佐野陽子訳『人的資本論』東洋経済新報社 一九七六年)

Drucker, P.F. (1971), "What can Learn from Japanese Management?", Harvard Business Review

Ellis, R.S. (1985), *Entropy, Large Deviations, and Statistical Mechanics*, Springer-Verlag

Friedman, M. (1962), *Capitalism and Freedom*, University of Chicago Press (熊谷・西山・白井訳『資本主義と自由』マクローヘル好学社 一九七五年)

深尾毅 (一九八七)『分散システム論—熱力学的システム論—』昭晃堂

Haken, H. (1978), *Synergetics: An Introduction to Nonequilibrium Phase Transitions and Self-Organization in Physics, Chemistry and Biology*, Springer-Verlag, Berlin Heidelberg (牧島邦夫、小森尚志訳『協同現象の数理 物理・生物・化学系における自律形成』東海大学出版会 一九八〇年)

Haken, H. (1983), *Advanced Synergetics: Instability Hierarchies of Self-Organization*, Springer-Verlag GmbH & Co. KG (斉藤信彦他訳『シナジエティクスの基礎』

東海大学出版会 一九八六年)

濱口恵俊(一九七七)『「日本らしさ」の再発見』日本経済新聞社

濱口恵俊(一九八二)『間人主義の社会 日本』東洋経済新報社

濱口恵俊・公文俊平編(一九八二)『日本的集団主義』有斐閣

濱口恵俊(一九九三)「日本型モデルの構造特性」濱口恵俊編著『日本型モデルとは何か 国際化時代におけるメリットとデメリット』新曜社

Hayek, F.A. (1944), *The Road to Serfdom*, (二)谷藤一郎訳『隷従への道』東京創元社 一九五四年)

今井賢一(一九八三)『日本の産業社会』筑摩書房

今井賢一(一九八四)『情報ネットワーク社会』岩波書店

今井賢一(一九九三)『資本主義のシステム 間競争』筑摩書房

Ising, E. (1925), "Beitrag zur Theorie des Ferromagnetismus" *Z. Phys.* 31

金見暁嗣(一九九四)「講員の宗教意識と宗教行動」宗教社会学の会編『宗教ネットワーク』行路社

木村敏(一九九三)「関係としての自己」濱口恵俊編著『日本型モデルとは何か 国際化時代におけるメリットとデメリット』新曜社

Koestler, A., Ed. (1978), *JANUS*, Hutchinson & Co. (田中三彦、吉岡佳子訳「ホロン革命」工作舎 一九八三年)

公文俊平(一九七八)『社会システム論』日本経済新聞社

公文俊平(一九八八)『ネットワーク社会』中央公論社

公文俊平(一九九三)「日本型モデルへのネットワーク・アプローチ」濱口恵俊編著『日本型モデルとは何か 国際化時代におけるメリットとデメリット』新曜社

公文俊平(一九九四)『情報文明論』NTT出版

McKenzie, B.R. and G. Tullock (1975), *The New World of Economics: Explorations into the Human Experience* (大熊一郎訳『新経済学読本』春秋社 一九七七年)

森嶋通夫(一九八四)『なぜ日本は「成功」したか?—先進技術と日本の心情』TBSブリタニカ

Nicolis, G. and Prigogine, I. (1977), *Self-Organization in Nonequilibrium Systems*, John Wiley & Sons, Inc. New York (小島陽之助、相沢洋二訳『散逸構造—自己秩序形式の物理学的基礎—』みすず書房 一九八四年)

Nicolis, G. and Prigogine, I. (1989), *Exploring Complexity*, R. Piper GmbH & Co. (安孫子誠訳『複雑化の探求』みすず書房 一九九三年)

Parsons, T. (1951), *The Social System*, Free Press, (佐藤勉訳『社会体系論』青木書店 一九七五年)

Popper, K.R. (1950), *The Open Society and Its Enemies*, Princeton University Press, (小河原誠、内田詔夫訳『開かれた社会とその敵』未来社 一九八〇年)

Popper, K.R. (1959), *The Logic of Scientific Discovery*, London Hutchinson (大内義一、森博訳『科学的発見の論理』上・下 恒星社 一九七一年)

Prigogine, I. (1980), *From Being To*

- Becoming*, W. H. Freeman and Company, San Francisco (小出昭一郎、安孫子誠訳『存在から発展へ』みすず書房 一九八四年)
- Prigogine, I. and Stengers, I. (1984), *Order out of Chaos-Man's New Dialogue with Nature*, Bantam Books, New York (伏見康治・伏見讓・松枝秀明訳『混沌からの秩序』みすず書房 一九八七年)
- 桜井徳太郎 (一九六二) 『講集団成立過程の研究』吉川弘文館
- 清水博 (一九七八) 『生命を捉えなおす きている状態とはなにか』中央公論社
- Simon, H. A. (1981), *The Science of the Artificial*, 2nd, MIT (稲葉元吉、吉原英樹訳『システムの科学』パーソナルメディア 一九八七年)
- 富永健一 (一九八六) 『社会学原理』岩波書店
- Tönnies, F. (1887), *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffen der reinen Soziologie*, (杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゼレルシャフト』理想社 一九五一年)
- 山本七平 (一九七七) 『空気』の研究』文藝春秋社
- 山崎正和 (一九八四) 『柔らかな個人主義の誕生 —消費社会の美学—』中央公論社
- 山崎正和 (一九八七) 『文化開国への挑戦 日本の世界的実験』中央公論社
- 山崎正和 (一九九〇) 『日本文化と個人主義』中央公論社
- 吉田和男 (一九八三) 『日本人間関係の数理モデル』EPS No.139
- 吉田和男 (一九八六) 『日本経済のダイナミズム』日本経済新聞社
- 吉田和男 (一九九〇) 『カール・ホパーと経済学方法論』京都大学経済学論叢 第一四五卷第三号
- 吉田和男 (一九九三A) 『日本型経営システム』の功罪』東洋経済新報社
- 吉田和男 (一九九三B) 『システム摩擦』日本評論社
- 吉田和男 (一九九三C) 『磁性体モデルによる日本型システムの分析』濱口恵俊編著『日本型モデルとは何か』新曜社
- 吉田和男 (一九九四A) 『もの見方 欧米と日本』同文書院
- 吉田和男 (一九九四B) 『ねずみ講社会の限界を打ち破れ』*This is* 読売 六月号
- 吉田和男 (一九九四C) 『日本型経営システム』の経済分析』京都大学経済学論叢 第一五四卷第二号
- 吉田和男 (一九九四D) 『日本型経営システム』の形成』京都大学経済学論叢 第一五四卷第五号
- 吉田和男 (一九九五A) 『講』システムの分配構造』京都大学経済学論叢 調査と研究 第八号
- 吉田和男 (一九九五B) 『日本型経営システム』の改革 (仮題)』読売新聞社近刊予定
- Weber, M. (1094), *Die Proletantsch Ethik und der Geist des Kapitalismus* (大塚久雄訳『プロテスタントイザムの倫理と資本主義の精神』岩波書店 一九五五年)
- Weidlich, W. and G. Haag (1983), *Quantitative Sociology*, Springer Ser. Synergetics Vol. 14 Springer (寺本英也訳『社会学の数学モデル』東海大出版会 一九八六年)
- Wilber, K. Ed. (1982), *The Holographic and Other Paradoxes-Exploring the Lead-*

ing Edge of Science, (井上忠他訳『空像
としての世界—ホログラフィをパラダイム
として』青土社 一九八四年)

Wolfren, K. von (1989), *The Enigma of
Japanese Power—People and Politics in a
Stateless Nation*, McMillan, (篠原勝訳

『日本—権力構造の謎』(上/下) 早川書房
一九九一年)